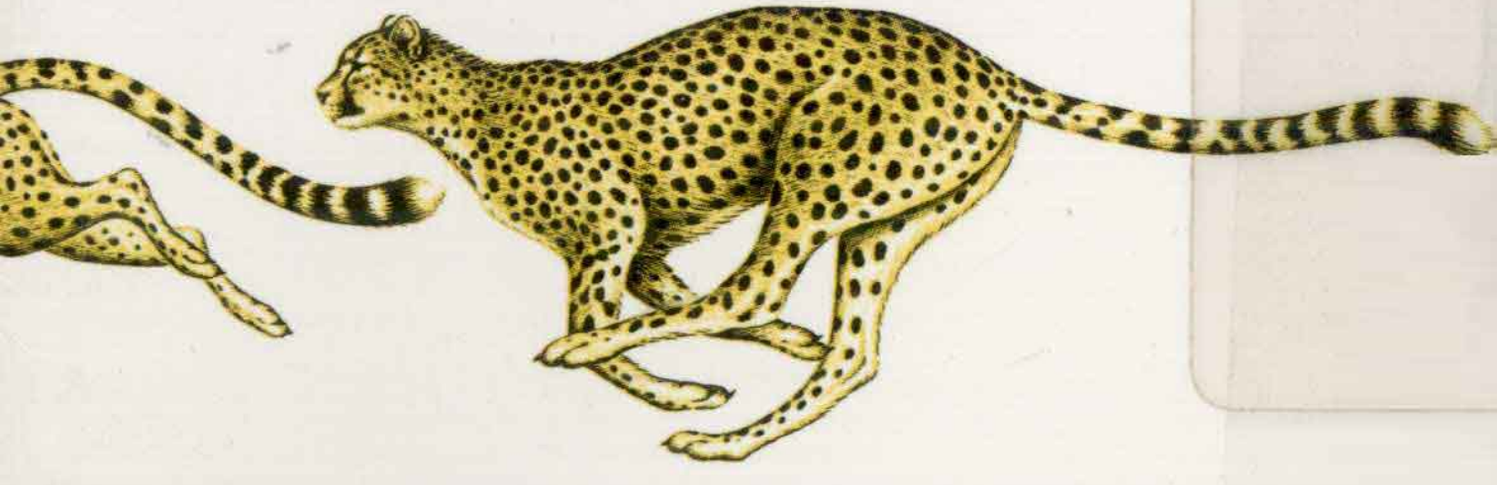
MARUZEN LIBRARY

愛すべきイギリス小説

小林章夫

ウイットとユーモア、パロディーやミステリー、平凡な日常の一片にかくされた真実、そして心おどる冒険や歴史——300年におよぶ多彩なイギリス小説の数々を語る。



小林章夫

愛すべ学ギ書ス小説

丸善ライブラリー

江苏工业学院图书馆藏

章

愛すべきイギリス小説　　丸善ライブラリー 045

平成 4 年 4 月 20 日 発行

著作者　小 林 章 夫

発行者　海 老 原 熊 雄

発行所　丸 善 株 式 会 社

郵便番号 103　東京都中央区日本橋二丁目3番10号

印刷　中央印刷株式会社・製本　株式会社 星共社

© Akio Kobayashi, 1992

ISBN 4-621-05045-1　C0298

はじめに

小説という形式はずいぶん自由なものである。何をどう書いたっていい。恋愛もあれば、殺人もある。不倫もあれば、旅もある。幽霊も出てくれば、狂人も登場する。生真面目に書こうが、茶化して書こうが自由自在。涙、涙の連続だろうが、抱腹絶倒だろうが、どうぞ御随意に。

読むほうだって勝手で気楽なものだ。なにも机にはりついて額にしわを寄せ、人生の一大事を考えるかのように本に眼を走らせる必要もない。カウチに背をもたせかけて読もうが、バーの片隅でひっそりページを繰ろうが、旅の宿で温泉につかって表紙を濡らそうが、これまた御随意に。一気に読んで寝不足になろうとも、毎日少しずつなめるように味わおうとも、それは読者のお好み次第である。

しかも暇つぶしとしては安あがりで、なおかつオシャレである。文庫本ならばせいぜいコーヒー二杯ぐらい、高くてもカクテル一杯の値段である。これで数時間の倦怠をうっちゃれるも

のならば、ずいぶんとお値打ちではないか。まして原語でペーパー・バックとくれば、ハンドバッグに入れても、リチャーズの袋に入れても(これは関西方面でしかあまりウケない)、オシャレであります(ただし、電車の中でこれ見よがしにとり出して読むのは危険。外人に声をかけられてシドロモドロの返事しかできないと、周囲がザマミロという顔をする)。

文学部の英文学科を出て大学院まで行き、おまけに女子大の英文科で英文学を教えるという恐ろしいことをやっているのだから、今までにかなりのイギリス小説を読んできた。

とはいうものの、それほど熱心な読み手とは言えない。まして読み巧者などではない。性格面では散文的だから、ロマン派は敬して遠ざけ、一応一八世紀の諷刺文学を主に勉強してきた。アレグザンダー・ポープという詩人で修士論文を書いたのだが、詩とはいったって人の悪口とパロディでもっぱら成立しているものだから、恋だの愛だのは大して登場しない。しかもそのうちに一八世紀イギリスの文化や社会に興味が移って、歴史まがいのものを書くようになってしまった。だからイギリス小説といったって、本格的に勉強したわけではないのである(と同時に、本格的に勉強する必要もあまりないのではないかという気持ちも、ちょっぴりある)。

それでも教師となったからには、いっぱしのことを言わなければならない。まして馬齢を重ねて(古いですね)英文学史とか、英文学概論などという講義をもたざるを得なくなると、一

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

応良心的に授業をやろうと思えば、今まで手を出さないでいた作品にも眼を通さなければならないのである。とはいうものの読める量は限られている。翻訳があればまだしも、原文でとなるととても追いつきはしない。

それにしてもいったいあの文学史というもの、一度でもつきあった方ならばよく御承知の通り、これほどつまらぬ、無味乾燥なものはないのである。文芸思潮の流れといったところで、当の作品を読んだことがなければ頭に入りっこない。それでいてテストはあるのだから、あとは作者名と作品名とを丸暗記してしのぐしかない。

講義するほうにしてもストレスのたまることおびただしい。客席を見れば、寝てるわ、しゃべるわ、枝毛は切るわ、あげくの果ては化粧ポーチを出して夜のお勤めに備えるやつまでいる。これで油断していると中に熱心に聞いているのもおり、これが授業終了後つかつかと教壇までやってきて、お話の中にありました小説はどんなあらすじなんですか、などとおそろしいことを訊く。なにしろ読んでもいないのに読んだふりをしてしゃべったのだから、答えようがない。いや、なに、うにゃむにゃ……。

それでも最近は、どこそこから翻訳が出ているから自分で読みなさいと言って逃れる術を身につけた。ひどいときにははじめから、この作品は読んでいないが、ものの本によるとこうい

うストーリーだと先手を打って、敵を煙に巻くこともある。ひどい話だ。しかしまあ誰もが英文学者になるわけでなし。

これに比べてわりあいに楽しいのは「英文講読」といった類の授業である。適当な作品をとりあげて訳読するという、あの伝統的授業。学生の誤訳をあげつらいつつ、まずはおおむね平和裡に進められる。ただし時たまデカイ辞書持参の上で、やおら単語の訳し間違いを指摘するとんでもないのがいるから、くれぐれも予習には手を抜かないこと。

ところがこうした訳読というやつ、学生のほうにとってはこれまた退屈きわまりない。おまけに、当たる順番がわかっていれば下調べも手間はかからないが、中には順不同、支離滅裂、その日の気分次第で指名する教師もいるからうかうかできない。他の人に当たってやれ一安心と思っていると、「スイマセン、予習してませーん！」とかなんとか言って、それでもやらせるかと思いきや、それじゃあそのうしろのキミ、なんてこともある。

さらに半期一〇回あまりの授業で丹念に訳読をやっていると、尻切れトンボになるケースがたびたびある。エッセイや論説文ならまだしも、小説となると登場人物が出揃ってさてというところで休みになる。あとは読んどけ。テストには全部出す。かといってスピード・アップすれば、学生の不満もまたつのる。とかくこの世はままならないものです。

こんな事情だから、概して英文科を卒業した人ほど英文学を読まない、イギリス小説が嫌いだというのが多いのではないだろうか（別に統計をとったわけではない。臆測です）。

というわけで、どんなおもしろい作品でも、教室でテキストとして読まされるととたんにつまらない味気ないものとなるという、例の定説がなるほどとうなずけるわけだが、勉強とか単位などといったことは忘れて読んでみれば、なかなかに楽しい経験ができるのではあるまいか。

ただし、ではいったいイギリス小説のどのような作品を読んだらいいのか。別に専門家になるわけではないのだから、手あたり次第に興味のもてそうなのを選び、つまらなければ途中でやめてまたほかを探す（このぐらいの思いきりがあったほうがいい）のがいいので、そうこうするうちになにか心に残る作品が見つかってくる（見つからなければやめたらいい）ものである。

だいたい教師というのは自分でも大しておもしろくないくせに、これは文学史上で重要な作品だからとか、昔から必読とされているからということで、妙に力んだ選択をする傾向がある。真面目な学生はこれをまともに受けとめて、やっぱりディケンズの『デイヴィッド・コッパーフィールド』は読んでおかなくてはいけない、ハーディの『テス』には目を通しておくべきかしらと考え、ただひたすらページをめくることになる。もちろんそれでおもしろければいいの

だが、これまた逆につらいだけの、義務的な読書となる可能性も高い。

おまけに一昔前の人はなにがなんでも原典を読むべしと攻め立てるものだから、『嵐が丘』の五ページぐらいでダウンしてしまう被害者が続出する。翻訳があるなら（もちろん読むに耐える水準の）どんどんそれを読んだらいいのである。

要するに、純文学とか大衆文学といった妙なレッテルにこだわらず、ともかく自分のフィーリングにぴたりとくる作品を読むことに尽きるということだ。

したがって、以下に選んだイギリス小説はまったく僕の個人的趣味によるもので、それ以外に選択の基準はない。二十数年あまりの貧しい読書経験の中から、読んでおもしろかった、感動したという作品を選び、それを軸に同じ作家のほかの作品、あるいは思いを及ぼした小説などについて気ままに語ったものという程度である。大した読書ガイドではないが、このようなものでも幸いにして興味を抱いてくれる方がいて、それをきっかけにイギリス小説の宝庫に自ら足を踏み入れてくださるならば、ツアー・コンダクターの役割は一応果たせたと言えるのではないか。

目次

◉ お戯れを……1
ヘンリー・フィールディング　『シャミラ』……2
ウィリアム・サッカレイ　「床屋コックスの日記」……9
P・G・ウッドハウス　「炎の求婚」……16
ロアルド・ダール　「牧師のたのしみ」……23
◉ 暗き淵より……31
D・H・ロレンス　「木馬の勝者」……32

ジョナサン・スウィフト　『ガリヴァー旅行記』……41
メアリー・シェリー　『フランケンシュタイン』……48
ジョージ・オーウェル　『動物農場』……55

◉日常の中の恐怖……63

ミューリエル・スパーク　『死を忘れるな』……64
イヴリン・ウォー　「ラヴデイ氏の遠足」……72
サキ　「開いた窓」……79

＊ちょっとお休み＊……87

◉愛の情景……93

ジェイン・オースティン　『自負と偏見』……94
ショーン・オフェイロン　「確実な人生」……101

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

アニータ・ブルックナー　『秋のホテル』……109
カズオ・イシグロ　『日の名残り』……117

◉

川を渡って……125

オスカー・ワイルド　「カンタヴィルの幽霊」……126
ローズマリー・ティンパリー　「ハリー」……133
デイヴィッド・ガーネット　『動物園に入った男』……140

◉

時の翼……149

サー・ウォルター・スコット　『アイヴァンホー』……150
ダニエル・デフォー　『ペスト』……157
H・G・ウェルズ　「タイム・マシン」……164
J・R・R・トールキン　『ホビットの冒険』……171

おわりに　177
あとがき　183

お戯れを

物笑いの種になるほど、笑わせてはいけない

――ヘラクレイトス――

ヘンリー・フィールディング『シャミラ』
（Henry Fielding, *Shamela*）

近代小説はサミュエル・リチャードソンの『パミラ』に始まるというのが、一応英文学史の定説である。なぜなのかとか、近代小説と前近代小説とはどう違うのか、いやそもそも「小説」とはどう定義できるのかなどといった問題は厄介だから、この際考えることを放棄する（これでも一応大学で英文学を教えているんだから気楽だねえ。『大学教授になるための方法』が版を重ねるのもよくわかる。ただし、一応「ちょっとお休み」の欄を設けて、少し書いておいたので参照していただければ幸い）。

さて『パミラ』だが、文学史的には重要な作品だけれど、まず一般にはあまり読まれることはない。英文学者でも読んでいる人は少ないのだから仕方ないが、まあそれほど食指の動かない小説である。

ストーリーはいたって簡単だ。さる御大家（ごたいけ）に奉公する娘（パミラ）が若だんなに誘惑されるが、それをあくまで拒否し続けたために、逆に若様のほうが改心、正式に妻としてめとるという、玉の輿物語である。

これだけのお話を延々と語る。しかもパミラが親元にあてた手紙で。そう「書簡体小説」というやつである。よくもまあこれだけ長々と書けるものだと思うが、驚くなかれ同じリチャードソンの『クラリッサ』なんかこの数倍も分量があるのだから、大変な御苦労だ。書くほうも読むほうも。

しかしこの『パミラ』、発表当時は売れに売れて一八世紀のベスト・セラーになった。フランス語訳まで出たぐらいだから、並大抵のものではない。特に女性たちに人気が高かった。まあ「ハーレクイン・ロマンス」か「プリティ・ウーマン」と考えていただいて結構である。

若様は小間使いごときと身体の関係を結ぶのは造作のないことだろうと考える。ところがあにはからんや、パミラの貞操は堅固である。あの手この手で攻めたてるが、いっこうに落ちない。いよいよと思うと、気を失う。これではどうしようもない。なんとも始末の悪い女だ。

普通ならここであきらめるのだが、それでは小説にならない。ところがやがて若様は自分の不徳を恥じいり、おこないを改めてパミラを正式に妻として迎えるに至る。めでたし、めでた

し。

ところがここに一人、『パミラ』という小説に猛然と反発した男がいた。いやその売れ行きに反感を抱いたのかもしれない。ともかくこんな物語が売れるとはけしからん、主人公パミラは決して純真無垢な乙女などではなく、まやかしに満ちた女だ、だから化けの皮を剥いでやる。

その男の名はヘンリー・フィールディング。リチャードソンとは違って（リチャードソンは庶民）名家の出で、学問、教養は比べものにならない。のちには『トム・ジョーンズ』という、これまた長いが、波瀾万丈の愉快な大河小説を書く男である。

そして『パミラ』の化けの皮を剥ぐべく書かれたのが『シャミラ』だった。題名からすぐにわかる通り、『パミラ』のパロディが『シャミラ』である。シャミラのシャムとは「まがいもの」の意、そして『パミラ』に登場する若様ミスター・Bは、こちらではミスター・ブービー（間抜け）と変えられている。さらにパミラの両親は謹厳実直だが、シャミラの両親はロンドンで身を持ち崩している。

ストーリーのほうも大きく違う。シャミラは清純な乙女ではない。清純を装うだけで、中身はすれっからしだ。『パミラ』の危機一髪のシーンは

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com